

人工呼吸器離脱へ治療方針統一

透析患者特化のケアも

札幌ライラック

「パー体操」を実施し、電気刺激を使用してシャントの維持・成長を促し、詰まりや閉塞の防止に取り組んでいる。管理栄養士は、タンパク質やカリウムの制限食を、通常食と同等の満足が得られるよう工夫することで、食べる楽しみを提供している。

川美千代リハビリテーション科長は、「患者一人一人の治療方針を明確化することで、スタッフが自信を持ち、実力を発揮しながらケアを提供できている」と効果を実感している。

今後は、長期入院や日常生活の制限で、ストレスを抱える患者の「したい」を叶えるケアに向け、内容を充実させていく意向だ。

16年から、委員会の名称を「人工呼吸器透析ケア検討委員会」に変更し、透析患者に特化したケアを充実させた。

臨床工学技士の指導の下「シャント成育リハビリ」を導入。患者の「グ

アップが患者の呼吸筋の耐久性を確認し、医師に情報を提供。同時に、管理栄養士が効果的に栄養摂取可能なメニューで体力向上を促すなど、一丸となって離脱を目指す。

臨床工学技士立ち合いのもと、人工呼吸器装着のままでの食事やシャワー、外出などを検討し、リハビリスタッフが、気管切開で失った声の代わりとなるコミュニケーションシ

豊平区の札幌ライラック病院（志田勇人理事長・本庄恭輔院長・167床）は、人工呼吸器使用患者の治療方針を多職種で共有し、離脱や質の高いケアを提供している。透析患者にも範囲を広げ、長期治療によるストレスを軽減することで、QOLとモチベーションを高めている。

同病院は、2014年に、多職種による「人工呼吸器ケア検討委員会」

を発足し、現在は月1回のペースで評議会を開催している。志田理事長をはじめ看護部長、各病棟の看護師長、事務長といった管理職のほか、リハビリスタッフ、臨床工

学技士、臨床検査技師、MSW、管理栄養士らが、入院相談時に確認した患者の人工呼吸器離脱意向と可否を踏まえて治療方針の統一を図っている。



外気に触れて季節を感じ、患者の気力を充実させている